

明治の佐伯三青年

33

龍溪・鳴鶴・鶴谷

御手洗 一 而

(賛助会員・川越市小堤)

大隈の入閣

政府の軟弱外交に悲憤慷慨し東京へ集まった壮士達は谷干城の下野に同情し、九段靖国神社の境内で、「谷君名誉表彰運動会」なる示威運動を試みると、勝安房も建白書を上呈した。八月になると、青森県の壮士齋藤進一郎は、東北の有志二百二十名の総代として井上外務大臣の辞職を迫り、九月になると、十七県を代表して井上敬次郎等が、宮内省へ押しかけて大臣に面会を求め、陛下に上奏せんと要請したが拒絶された。その後板垣は、政府の弊政を十四か条にまとめて痛烈に批判し、後藤象二郎は、壮士を前にして、

「我口舌を以て兵刃に代え、我肉体を以て砲台に代へよと煽動し、丁亥倶楽部を結成して氣勢をあげた。

怒涛の如くおしよせる政府の批難にたまりかねた伊藤は、自らも評判の悪い宮内大臣の兼任を解き、臨時に外務大臣を兼ねて、外務大臣井上馨を更迭した。井上を中間顧問官に廻し、新たに黒田清隆を農商務大臣に任命し伊藤は一部の世論を採り入れる形をとったが、一方では政府の示威訓令を出した。だが、このくらいで治まる世論ではなかった。野心家の後藤象二郎は、すでに地下運動を開始していたが、政府もこれらの動きはすでに察知し、やむを得ざる場合は、力で押さえ込むことを考えていた。

巷では、大臣暗殺計画や東京市中の焼き払いなどという恐ろしい陰謀が、まことしやかな風説として流され、後藤象二郎はこの機会に、

「小異をすてて大同をとり、専制政府を倒すにしかず」と、自由・改進黨に呼び掛け、政府の包囲攻撃をはじめめる有様であった。

誘いを受けた改進黨においても、その本拠地である報知社には、連日党員がつめかけて議論が百出した。朝野新聞に移っていた尾崎や、犬養も、この情報を探知すると、自分の仕事はそっちのけで報知社に顔を出した。

「後藤の言うことにも一理あるが、この際、党の方針を決める方が先決問題じゃ」

勢い込んだ尾崎の意見に、落ち着いた加藤政之助の声が返ってきた。

「そう慌てるな。大隈さんや福沢さんの意向を確かめている」

「年寄の意見か。今更脱党組の意見を聞いても仕方あるまい」

「そうばかりとも言えぬぞ」

珍しく尾崎の話に割って入ったのは箕浦であった。

「やはり後藤という人物を一番よく知っているのは、大隈さんや福沢さんじゃ。大同団結と言えば聞こえはよいが、烏合の衆の集まりでは話にならない」

「確かに後藤には野心的なところがある」

「煽動だけでは話にならないのじゃ。大同団結する以上、政府に対抗するだけの政策がなければならぬ」

加藤はこう言う口を閉じた。

「そう言えば、後藤では、自由党や改進黨のような基本方針は見えぬのう」

尾崎も政策の一点では納得した様子であったが、穩健

な加藤や箕浦は、多分に遠慮して後藤の批難は避けるふうであった。だが、腹の底では、改進黨にしても自由党にしても、結党以来散々な苦労を重ねているのに、今更後藤にいい顔をされてたまるかという意地があった。

矢野はこれらの議論を耳にしながらも、知らぬ顔をして論議の輪に入らなかつた。そしてその夜、矢野は藤田を自邸に招いて、この場の議論や言外に隠されている加藤や箕浦の思惑を話した。

「そりゃ加藤や箕浦の思惑通り、とんびにあぶらげをさらわれてはかなわぬわい。奴等は他人をけなすような仁ではないからのう」

藤田は單刀直入にこう言い切つて一笑に付した。

「尾崎も後藤には野心が見えると断言していたが、よく見ていると思う。国内を見廻しても、大体三派に分けられる。自由党系に改進黨系。どちらにも与しない者はおおむね御用党組じゃ。こう考えてみると、後藤が残りの小党を糾合してもたかがしれている。それよりも党の切り崩しに眼を配らねばならぬ。どだい、まとめきれぬものもあるまい」

「第一、今更後藤に頭から押さえつけられてはかないま

せんわい」

藤田は頭から大同団結など相手にしていないふうであった。

「わしはのう、それよりも別の事を考えているんじゃ」「別の事と言いますとー」

藤田が問い返した。

「世想がこんな騒々しくなったのも、条約改正が契機になったが、欧米の力を知らぬ間は、誰が改正に手をつけても失敗すると思う。伊藤さんもこれには手こずっていると思われるが、薩長の政府だけではすでに限界にきていると思う。われらの意思を反映するためには、ただ政府に反対するだけではなく、政府部内に人を送り込むのも一法だと思っている。わしは近頃ではそう考えるようになっていいるんだが、茂吉はどう思うかのうー」

「うーん」

藤田は問われて一瞬うなった。

「十四年の政変にはひどい眼にあいましたが一」

「そのことじゃ。あの時は薩長の力が強すぎたが、今では薩長で政府を背負い切れなくなっている。自由党や改進黨から人材を送り込むのも近道だと思うかのうー」

「それにこしたことはありませんが、伊藤さんが受け入れるでしょうか」

藤田の疑問であった。

「どうなるかわからぬが、わしは一つ仕掛けてみようと思っているんじゃ」

「さしづめ大隈さんですか」

「いやあ、大隈さんということではないが、近頃の流言蜚語は伊藤さんの私事にまで及んで、伊藤さんも窮地に立たされている。わしは報知紙上から伊藤さんに塩を送ってみようと思っている。先のことは分からぬが一」

「どのような形でー。反撓を買わねばよいが一」

藤田も心配そうであった。

「なに、最初は新聞の報道主義を楯にとる。伊藤さんにかかわる流言は、調べてみたがこうこうだと、事実が判明しなかったと書くだけで伊藤さんは救われるだろう。それで暫く反応をみればよい。茂吉。これが本場の新聞の力じゃ」

矢野はこう言って、自信ありそうに結んだ。

藤田は矢野の口から、「新聞の力」と聞かされ、この年三月に発行した『済民偉業録』の売れ行き次第では、

来年の秋にも欧米視察に洋行したいと、矢野の自信を羨ましくさえおもった。

「そうしてみると、新聞の力は大きい。大同団結は暫く傍観するとして、政府に塩を送るのも一つの方策かもしれない。時期が時期だけに試してみる必要はありそうだ」

藤田も矢野の自信におされて、納得した様子だった。

「大同団結の件は、わしらの意向が党の方針になると思うが、今夜話したことは胸の内にとりかかっておいてくれ。変に口に出すと、とたんに裏切者にされるからのう」

矢野はこう言っではじめて白い歯をみせた。

こうして矢野は、藤田にだけ胸の内をあかすと、早速報知紙上で伊藤総理の弁護にとりかかったが、弁護も二度三度に及ぶと、確かに手応えがあった。

ある晩、末松謙澄がわざわざ矢野の邸を訪ね、矢野の好意に対して礼を述べた。

「いやいや、それがしはありのままの事実を報道したままでござる。欧米の新聞は、事実の報道が主眼でござる」
矢野はわざとそつなく応えたが、末松は重ねて礼を言った。

「あらぬ噂で伊藤さんもほとほと困惑してござったが、

貴公のおかげで救われたと大変喜んでおられた。貴公のようにものわかりのよい者ばかりだと、政府もじつくり腰をすえて施策にとり組めるのだがと苦笑しておられた」
「いやあ、さほどのわかりもよくないが、余りにも近頃の政府は人気がない」

矢野はあくまでもぶっきらぼうを装った。

「確かに言われる通りだが、外交問題は誰がやっても政府の命とりになる。こればかりは名案がなくて」

末松は口を濁したが、暫く間を置いて話題を変えた。

「ところで、大隈さんはご健勝でござろうか。改進黨も今では若手が経営されていると聞き及んでいるが、国家の大事にもう少し皆の力を貸して欲しいと嘆いておられた」

末松もさりげなく「大隈」を口に出したつもりであるうが、矢野は読みが当たったと顔面には表さなかったが、小躍りしたい思いだった。

「さて、近頃は新聞社の経営で忙しく、お訪ねもしないが――」

「さようでござるか。お会いの節はどうぞよしなに」
矢野は、あえて政変のことなど口に出さなかったが、

末松も一口添えただけでこの日は引き退った。お互いに腹の探りあいであった。

末松も矢野に話せば、やがて大隈の耳に入るだろうとの思惑があり、矢野も伊藤の伝言だとは聞かなかったが末松が伊藤の深慮を代弁しているとなっていた。

こうして矢野の目論んだ政府への誘い水は、時宜にかなったものであった。政府は条約改正の失敗から、内閣を更迭してまで態勢の立て直しを図ろうとしていた時だけに、矢野の支援は天の助けとばかりに改進黨への歩み寄りを見せはじめ、伊藤一派は水面下で大隈と接触をもつまでになっていた。

党の方針を決めた矢野は、報知紙上から黨員の一層の団結を要望したが、帝政党や自由党の解散したこの時期を狙った後藤の地下運動は、条約改正に激怒した不満分子を刺激して、隠然たる勢力をかもしつつあった。

だが、この状況を放置できずとみた政府は、年の瀬も迫った十二月二十六日、機先を制して、突如官報号外を以て保安条例を發布して弾圧に乗り出した。

条例は秘密の結社や集会を禁じ、新聞や印刷物も検閲を行うというものであったが、第四条には、政府が内乱

を陰謀し、又は治安を妨害する虞があると認める者は、皇居や行在所から三里の外に追放する一項目が加えられこの条例は発布の当日から施行された。

当日、東京在住の志士中、政府からこの第四条に該当すると睨まれた者は、五百七十余名にのぼり、何の証明もなければ一語の弁明も許されず、即日追放された。この時の追放者には高知県人が多く、中でもこの命に従わなかった片岡健吉や林有造、星亨も、のちに石川島に投獄された。矢野の伊藤支援もあって、この時の改進黨員は多く難を免れることができた。尾崎はこの時に睨まれた一人であったが、機敏に動いて欧米視察の名目で日本を逃げ出した。

こうして、明けて明治二十一年を迎える。

伊藤は非常手段をもって、一時的に東京の治安を保ち政府の安泰をはかったが、追放の期限は三か年、つまり国会開設を約束した明治二十三年まで、この間に政府の立て直しをはからねばならなかった。この頃から伊藤は薩長政府のそしりを避けて、内閣を一新すべく、大隈に近づいていた。

当の大隈は、新年の年賀に集まる学校職員や改進黨員の中に、矢野の姿を待ち受けていた。矢野が現われると大隈は年賀の口上を受けるのももどかしく、声を出して笑いだした。

「矢野。おぬしが伊藤に塩を送るものだから、新年早々伊藤の頭まで目出度くなってきたぞ。あの大げんかをしたこのわしに、使いをよこして来おったわい」

大隈の一声に、並みいる連中は矢野がいかに答えるか一瞬座が静まり返った。

「そうですか。政府も薩長だけでは背負いきれなくなり見栄や外聞を捨てるのも意外に早かった。伊藤さんもご苦労なことですね」

半分はとぼけ、例の調子で真面目くさって答える矢野に、連中の中には吹き出す者もいた。

「おまえさん。一体わしをどうするつもりか」

大隈もこうは言ったものの、顔では笑っていた。

「さあ。伊藤さんも国造りには、どうしても先生が必要だとわかったのでしょうか」

あくまでも他人事のような矢野の言い方に、今度は爆笑が起った。

明治十四年の政変以来、犬猿の仲になっていた大隈と伊藤の仲が、このくらいで修復するはずがないとは、大隈の傘下が誰しも思うところであつたが、国造りに大隈の力が必要だと矢野に説かれると、悪い気分もせず正月早々景気のない笑い声が大隈邸をおおった。

「なに。仕掛人の張本人にこうとぼけられては、わしも立つ瀬がないのう」

大隈もこう言いながら、多勢の前ではこれ以上この話を追及しなかった。

この日矢野は、大隈邸を辞す時、

「伊藤と会うだけは会わねばなるまいのう」

と、大隈から聞かされ、内心では伊藤の弁護も効果があつたとほくそ笑んでいた。

そして十日程して、再び大隈から呼び出しがかかった。「矢野君。伊藤はどうも本気らしいぞ。わしが今までのいきさつ上相手にしないものだから、今度は黒田を連れて来るとか言いおった。今更詫でもあるまいが、どうしたものかのう」

大隈はこう言つて、今では改進黨を預かる矢野に相談をもちかけた。黒田とは、例の明治十四年の政変の際、

きっかけとなった北海道開拓使官有物払下事件の当事者であった、開拓使長官の黒田清隆であるが、この時農商務大臣に就任していた。

矢野は腕を組んだままじっと考えていた。

「おぬしの腹はわかってるんじゃ。このままで薩長に牛耳られるよりは、入閣して憲法制定に改進黨の意見を入れさせようというのであろう。その主旨もわからぬではないが、わしにもわしの考えがあるのじゃ。井上の代りに今度はわしが泥をかぶされてはたまらぬでのうー」
矢野は大隈の不安がわからぬでもなかったが、すぐ切り返した。

「いっそのこと伊藤さんと代わられてはいかがですか」

「まさか」

大隈も薩長が内閣を譲るはずもなく笑いとばした。

矢野は急に改まった。

「明治十四年の政変の時のように孤立しないためにも、伊藤さんの独断ではなく、閣僚全員の支持を得たいところですが、要は内閣がどのくらい危機感をもっているかということですよ。そこを見極めたいと思いますが一」

「その通り。わしはかなりせっぱつまっていると思うが、

つまればつまるほど頭を下げてくるわい。暫く様子を見るか」

大隈は全く逆の立場になって強気になっていたが、まだ入閣の意思など毛頭なかった。

矢野は、数日後党の幹事を集めてこの成り行きを諮った。

「党としてこの機会を逃す手はないが、全国的にかなりの支援が必要じゃ。今度こそ党の命運がかかっている」
藤田の党としての基本線には皆も賛成であったが、具体的に大隈支援の方法となると名案がなかった。

「何とかして伊藤に足かせをはめておきたいのだがー」

沼間一派の島田三郎であった。

「まさか薩長が内閣を譲るとは考えられぬが、一つには薩長の撃退法、一つには薩長を骨抜きにして、大隈さんが内閣の実権を握るようにしむければよい」

肥塚龍であった。

「条約改正でも成功させれば文句はないが、これがなかなかむつかしい」

箕浦勝人の考えることは皆も同じであった。

矢野は皆の意見を黙って聞いていたが、とにかくこれ

で党の方針は固まったと、この経緯を大隈に報告した。

矢野は矢野なりにもう少し広い視野で秘策を練っていたが、状況を見極めるためにも胸に秘めていた。

大隈から再度呼び出しがあった時は、すでに小正月も過ぎ、木枯らしの吹きすさぶ寒い夜であった。矢野は辺りをうかがいながら大隈邸へ入った。

大隈は奥座敷に端然と正座して矢野を待ちうけていた。

「何か進捗がありましたか」

矢野は挨拶もそこそこに問うと、大隈は大きく頷いた。

「困ったことになったぞ。今までは飲み食いの席ですが、昨日は例の黒田清隆を連れてきて、何を言い出したと思う。伊藤は黒田を後釜にすえて、自らは身を退くと言うんじゃない」

「えっ、身を退く。そこまで追い詰められていましたか」

「うん。伊藤自身は総理大臣をひいて、枢密院を創立したい腹らしい」

大隈はここまで話して一旦話を区切った。

「伊藤にそこまで言われると、わしも少しは責任を感じるんじゃない。どうせ黒田の総理は名ばかりだが、わしに外務大臣として入閣し、内閣を任せるとまで言われると、

男として逃げ出すわけにもいくまいてー」

「お受けなさいませ。先生のふだんの政策を表におし出せば、大隈内閣も同じでございます」

矢野の即戦即決がはね返ってきた。

「そろそろ腹を決めねばならぬかのう」

大隈も矢野の即答で決意した様子であった。

「時節到来でございます。皆にもこの旨知らせますが、意向もあると思いますので、もう一度次に会う日をご連絡下さい。」

矢野はこう言って深々と頭を下げた。

「ただし、矢野君。わしを押し出しておいて、おぬしは知らぬ存せめでは許さんぞ」

大隈の言い方がおかしく、矢野は思わずふき出したが、ただ頷いていた。矢野は思い通りに事が運ぶと思った。

ここまでくれば、伊藤が臨時に兼任する外務大臣の要職は、こちらの返事次第だとほくそ笑んだが、矢野はもう一つ伊藤に足かせをはめる手段として、又日本の将来のために、英国議会で見聞した議会政治を公にしたいと考えていた。矢野の考えが実行出来れば、肥塚の言った薩長の撃退法にもなるし、いわば大隈入閣の交換条件と

して、矢野は練りに練った秘策を胸にしまっていた。

矢野は大隈からの次の連絡を待った。

大隈が再度伊藤等と会合するという当日、矢野は早起きして人力車を走らせ、大隈の朝の散歩の時間に合わせ、大隈邸を訪れた。矢野の姿を見た大隈も驚いた様子で、

「何ぞ急用でも出来たか」

と、振り返りながら、応接間に足を運んだ。

「最終決定の前に、これをご覧にいれようと思ひまして」

矢野はこう言つて、一枚の覚書が大隈に手渡した。

「うーん」

大隈は立ったままこの覚書を読みながら、ちらつと矢野に視線を送ると、どっかと椅子に腰をおろした。

覚書は三カ条からなっていたが、主旨は国会開設に当つては、議員の多数を占める党派の首領が組閣を命ぜられるとするものであった。

「これは理にかなっている。薩長もこれでは手出しが出来なくなるが、内閣が主体になって党を作るとなると、別の問題が生じてくる」

「その通りでございます。英国議会ではこの制度が定着しておりますが、わが国の政治はまだそこまで熟しておりません。ただ一度だけはこの交換条件を提示してみて下さい。甘く見られないためにも、伊藤さんなら何かを感じると思います」

「わかった。国の将来のためにも、正論だけはいておかねばのう。ただし見物じゃわい」

大隈はむしろ面白がっているふうであった。

この日、矢野は一旦報知社に出社したが、夜になると落ち着かず、再び大隈邸を訪れて大隈の帰りを待った。

大隈の帰邸は大分遅く、かなり酩酊の様子であったが大隈は威勢がよかった。玄関まで迎えた矢野を見ると、
「気持ちよく蹴ってきたぞ」

と、言いながら、奥座敷に矢野を招いて人払いした。

「おぬしがあのような覚書を見せるものだから、しまいには又入る入らぬでんかになったわい」

大隈はこう言つたが眼では笑っていた。

「今急にヨーロッパのようなわけにはいかぬわいと、二人は一笑に付していたが、確かに伊藤は少々慌てていた。痛いところをつかれたのであろうが、あの用心深さは見

習わねばならぬ」

大隈はコップの水を一気に干した。

「三人が夜な夜な密談をこらしている、知られるだけでもうるさくなるのに、こんな約束事が公然と暴露されると、大権を私事にする奸物として、謀反人扱いされると言うてな、伊藤の奴あの覚書をストーブに投げ入れて焼きおった。矢野君。確かに効果はあったわい」

大隈は平然としていた。

「伊藤さんの頭に入れただけでもよかったと思わねばなりません。確かに今の日本では時期尚早のそしりは免れません。政党色が強くなると、内閣とのいさかいが絶えないかもしれません。だからといって、総理大臣の薩長たらい廻しでは人心もおさまりません。いずれ内閣の制度も改革化しなければならぬと思っております」

矢野は自分なりの意見としてつけ加えた。

「その事は、伊藤も感じているらしい。憲法を制定して国会を開設すれば、次々にそんな難問題が起ってくると暗にほのめかしていたわい。そのためにも今は三人で力を合わせて、この難局をのりきりたいと力説しておった。案外政府も目下手一杯というのが本音であろう。二年三

年はすぐ経つからのう」

大隈の話はあくまでも他人事のような話ぶりであった。

「ところで、喧嘩別れではないでしょうね」

矢野は少々心配になっていた。

「馬鹿。国を預かる大人の話じゃ。酒は飲んでも国のことは考えねばならぬ」

「安心致しました」

「近いうちにもう一度会おうということになったが、次は答を出さねばなるまい。余り引き延ばすのも、因縁めいてわしの品位を疑われる」

大隈はいつもの口調に戻って、こうしめくくった。

「ごもっともでございます。これだけ念を押しておけばあとは政府部内から改革を進める方が先生の意にそっているものと思われます」

矢野の最終的な判断であった。

「その方が早いかもしれぬのう。よし。もう一度泥をかぶって、最後のご奉公を勤めるか」

大隈の最後の決意を固めたようだった。

矢野が腰を上げた時は、深夜も大分廻っていた。玄関まで書生に見送られた矢野は、外に出ると大きく背伸び

した。空から小雪が散らつき始めていた。

「おお。さすがに厳冬は冷えるのう」

矢野は呟いたが、言葉とは裏腹に心は暖かく、大仕事を終えた安堵感で一杯であった。

この話には後日談がある。後年、矢野が伊藤に会った時、伊藤は

「あの覚書を大隈に渡したのは君だろうー」

と述懐したが、さすがに伊藤はこの時すでに矢野の入れ知恵を見抜いていた。

大隈は伊藤の要請を受諾し、二月一日、正式に外務大臣として入閣した。大隈の入閣に対しては、山県内務大臣をはじめ、政府部内でも多少の危惧の念を抱く者もいたが、そこはぬけ目のない伊藤のこと、政府部内はおろか世論の鎮静にまで気を配り、まず人事の面から着実に伊藤の計画を実行に移し始めた。伊藤は四月二十八日に枢密院を新設した。

枢密院とは、天皇の親臨を仰ぎ、重要国務を諮詢する最高の顧問府とするもので、四月三十日、伊藤は自らの枢密院議長に就任し、予定通り農商務大臣黒田清隆に内閣総理大臣の席を譲った。伊藤はこうして人心の一新

を図ったが、一方ではこと枢密院における憲法草案の討議に専念する目論みであった。

政界に復帰した大隈は、山積する難問を前にして、再び脚光を浴びる立場になったが、大隈の復帰によって、改進黨の元副総理であった河野敏鎌も枢密顧問官に任命され、明治十四年の政変で下野した人々も、相ついで官途につき、全国の改進黨員にとっては、一陽来福の思いであった。

まして、総理大臣の黒田清隆は、薩摩の軍人出身で、根っからの政治家ではなく、政務上の実権は、すべて大隈の双肩にかかり、これを閣外から伊藤が補佐し、目付役の役目を果たすという黒田内閣であったから、一躍大隈が脚光を浴びるのも無理ではなかった。

矢野がロンドン滞在中世話になった、英語に堪能な加藤高明が大隈の秘書官になるのもこの頃である。

大隈復歸の余波が落ち着いた頃、矢野の休日を見計らって、藤田がひょっこり長男敏夫を連れて矢野邸を訪れた。矢野は庭先で盆栽をいじっていた。

「忙中の閑ですな」

藤田の声に矢野は一瞬ふり返った。

「なんだ茂吉か。丁度よいところへ来てくれた」

と言いながら、傍の子供に眼をやった。

「確か敏夫君だったかのう。いくつになる」

「はい、十一歳になります」

敏夫ははっきり答えながら幾分照れて

「そうか。もう十一になるか。早いものよのう」

矢野はこう言いながら、豊吉の忘れ形身から、過ぎ去った年輪を思い起こしていた。

「あつという間に年をとりましたが、今度はうまくいきしましたな」

藤田はどつかと縁先に腰をおろした。

「今度こそはわしも疲れたわい。どうやらここまでではこぎつけたが、自分のことや家のことはさっぱりじゃ。先輩や友人には礼を失するし、ゆっくり考えたいこともあるが、どうにもならん。これからが正念場というのに、何から手をつけてよいかわからぬ」

矢野は苦笑しながら縁に上がると、二つ三つ腰を叩きながら、藤田を応接間へ招いた。

「この度の裏工作が評判になっております。どこからか知れるものですなあ。ある新聞では矢野さんのことを

『民間大臣』のニックネームまで付されておりました。

この際、私事の疎遠は少しばかり辛抱してもらわねば」

『民間大臣か。そりゃいい名前じゃのう。大衆も政治というものがどういふものか、少しづつ理解してくれるようになるわい」

矢野はこう言つて、『民間大臣』の渾名をつけられて悪い気はしなかったが、遠慮のない藤田には、心配事の方を先にうちあげた。

「のう茂吉。社の方はどうやらもち直した。銀行の借金も少しは返せるようになったが、問題は御大將じゃ。党に金がなければ、いざという時に大隈さんの支援は出来ぬ。そのことだけは覚悟しておいてくれ」

「そのことです、先日牟田口と党の資金について話している時、丁度荘田さんがみえて、福沢さんも党に金が要ると心配されていたそうです。一度党の委員に諮ってみなければなりません」

藤田の反応がすぐ返ってきた。

「そうしてくれ。自分の意見を通す奴は多いが、金の心配をする奴は一人もおらぬ」

矢野は党の資金の話になると、心配とともに不満そう

であつた。

「ところで莊田さんはご健勝か。暫くお会いしていないが―」

矢野は急に同県人で先輩でもある莊田さんの名前が出て、急に学生時代を思い出してゐた。

「莊田さんも洋行を計画中でして―」

「そうであつたのか。それで茂吉の方はどうなんだ。

『済民偉業録』も大分評判だと聞いているが―」

「目処が大体つきましたので、出来れば莊田さんと同行したいと考えております」

「それはよかった。とにかく一度は欧米を見なければ話にならぬ。百聞は一見にしかずとはよく言うたものじゃ」

「年末か来年早々になりましょうか」

藤田の答がでたところで、矢野はじつと考え込むふうであつた。

「おぬしが銀行に關与するのは有難いが、あの論争を折るのは惜しいと思つてゐる。洋行準備とあらば致し方ないが、人間の出処進退もままならぬものよのう」

「何か―」

藤田は矢野の口から、人間の出処進退がままならぬと

聞いて、一瞬げんそうな顔をした。

「いやあ、人間には運命的な定められた道があるのかのう」

矢野はしみじみと變つてゆく環境の変化を運命的にとらえていたが、藤田の考えとはかみあわなかつた。

矢野は洋行から帰国してみると、藤田がほとんど論壇から身を退いていることを知つて、驚きとともに不満であつた。兄弟のようにして育つた矢野にとって、藤田の才能を惜しむのは当然で、藤田の才幹を一番よく知つてゐるのも矢野であつた。あの民権運動で国論をわかつた時、一方の旗頭として論陣を張つた藤田が、この大事な時に陰をひそめるのはたえられなかつた。矢野は確かに疲れてゐた。暫く休暇をとつて佐伯に帰えろうかと思つてゐた。その間、もう一度藤田を論壇に引き戻そうとも考えたが、藤田は洋行で胸を躍らせてゐた。人にはそれぞれ違つた生き方があるとも思い直し、あからさまには口に出さなかつた。

「洋行も思つた時に実行せねば、時代にとり残される」
藤田はぼつりともらした。

「その通りじゃ。伊藤さんが憲法制定に拍車をかければ

時局は急転直下動き出す。国会開設の前にはわが国で最初の選挙も行われる。急がぬと猶予はならぬぞ。茂吉。

これからは国政の場で論陣を張らねばならぬ」

矢野はこう言って、民権運動に熱中した時の藤田の血を、もう一度かきたてるように激励したが、内心では、一時言論界から遠ざかってはいるが、まさか洋行を口実に初志まで投げ出したのではあるまいと言いたかった。

一方藤田は、その日親子で久しぶりに夕食をご馳走になったが、矢野の言葉の端々に、党のこと会社のこと、雑用を整理する気配がみえて気がかりであった。

藤田は矢野が再度政府入りかとも思っ

「大隈さんからの誘いはどうなっておりますか」

と、思い切って聞いてみたが、

「どうもその気になれぬのじゃ」

と手を横にふるだけであった。

「少しは人間らしいゆとりが欲しいのう」

矢野のしみじみした言葉に藤田も大きく頷いたが、この時藤田は、矢野の心の中に、単なる重責による心身の疲労よりも、何かの変化が起っていることを感じとって

いた。

